

再び「五時通信」について

五月号の巻末に諸兄弟の通信に関する省察がいくつか載せられておりました。それらを共感とともに読ませて頂いたあと、なにはサテ、十年余もこうして続けて来られたそれぞれの方の「持続する志」にまずもって敬意を表したいと思いました。

意余りて言葉足らず・・・通信を書いてみると自分の言葉の貧しさをまざまざと見ることになって、しばしば独り赤面するのですが、それよりも肝腎の「意」が萎縮していて、心中空々漠々、実は自分にはとりたてて「志」らしいものはなく、ただ時の流れの中を漂っているだけだというのがよく判ります。表現する手技の貧しさ以前に、表現したい内容の乏しいことを思い知らされます。

そうではあるのですが、しかし、かくてはならじとばかり「意」を奮い起こして、月に一度ぐらいは必死の形相で何かを書き付けて見たい気持ちはあります。栄養ドリンクの広告にいう「近頃何か身体に良いことしていますか」ではありませんが、なけなしの「意」を掻き集めて、月に一度発信して見るのは、精神にはとても良いことのように思います。アタマの体操、縄跳び、散歩、水泳、山登り・・・そして精神の飛翔へといけばいいのですが。

それにしても、何を言いたいのか、書きたいのかが自分でもはっきりしないのは困ったことです。自分なりのささやかな経験も発見も、そしてまた思索も、ありふれていて、手垢がついていて、つまらないものとしか思えないので、わざわざ通信する価値はないと感じてしまいます。日常の忙しさを理由にしてサボっていますが、必ずしもそればかりではないのです。

ところでヘンな話ですが、一ヶ月前に自分の書いたものを活字にして頂いて読み返す時、ちよつど忘れかけていた写真を引き伸ばして貰って眺めているような感じがしますネ。晴れがましさと嬉しさと、あッそうか、こんなことあったなという記憶の再生と、相変わらず俺は写真映りが悪いなあという嘆息と・・・。